

なく、長曾我部殿周章しける處に、家久様津川上平左衛門を以、長曾我部殿へ御使有けるは、今度御息左京殿打取る事、弓箭之故不及、是非次第也、然處に船も汐干に成り、難浮見へたり、緩々と待鹽可有解陣之由被仰付候、誠に名將之御至也と、諸人感申候、帖佐宗辰覺書

〔東遷基業十七〕關ヶ原合戰附秀秋裏伐の事

俄に軍使を呼て、徳川家康裏切せらるべき御内通有、急ぎ先手の諸隊長に、此むねを申聞らるべしと云合て、石見岡平と稻葉佐渡守と兩先手の陣將、螺を吹せて、旗を立直しける、使番村上右兵衛、先手の隊長松野主馬が陣に行向て、裏伐の下知を傳へければ、松野は大に驚きて、今にも御下知あらば、山下へ下り、關東勢を追立て、功を立んと待かけたるに、思ひがけなき御下知なり、今かく勝負まぢくなるに、當手より裏伐せらるゝに於ては、不忠と云、不義と云、取所もなき御行ひならん、まかれば他の先手の諸隊長は、たとひ裏切の軍するとも、我等は素志を空くせず、關東勢と戦ひ、討死せんと云ければ、右兵衛、松野を諫めて、貴殿の申さるゝ所も、さる事なれども、はじめより御内通あるとの事なれば、今更御違變成がたからん、まがるに貴殿、君命に背き、關東勢と一戦あらば、それも又不忠不義成べし、ひらに隨ひ給へと云ければ、松野も此理にせめられて、麓へ人數をろしけれども、手の者を引纏ひて、裏切の軍するを見物してぞいたりけり、

〔駿臺雜話三〕天野三郎兵衛

天野三郎兵衛景は慶長年中、駿州興國寺の城主として、三萬石を領しけり、領地の竹をきらせ、營作の爲に積置て、足輕三人をして、守らせけるに、御領田原の郷民、此竹を盜取しかば、番をせし足輕見付て、盜一人をきり殺す、殘黨逃去て、代官井手某に訴ふ、略中人を康景がもとへつかはし、御領の民を、こなたへ斷なくして、卒爾に殺す事重罪なり、速に其足輕を誅すべきの由を、いひやりければ、康景盜を殺すは、古今の法なり、なにをもて罪とせん、其上かの足輕、私に殺すにあら